

# 第一次国共合作の成立について

北村 稔

【要約】第一次国共合作は複雑な政治状況のなかでかろうじて成立した協力関係であった。合作の目的は「国民革命」の実現であり、国共両党の党員のあいだには思想面での共通性だけではなく人間関係も存在していたが、両者は「国民革命」の実現方法では異なった道をあゆんでいた。共産党は国民党を合作の対象とはみなしておらず今日では軍閥として否定的にしか評価されない陳炯明や呉佩孚に接近していた。国民党も共産党を対等の政治勢力とはみなしていなかった。両者を結びつけたのは中国内に親ソビエト勢力をもとめていたコミンテルンとソビエト政府であった。しかし国民党側の西欧列強や軍閥への接近と、共産党側の反撥により合作は難行する。結局は共産党の陳炯明や呉佩孚との関係が破綻し、国民党も西欧諸国においてにされず互いにあゆみよることになり合作は成立する。しかし両者のあいだの矛盾は日をおってふかまりつつあった。

史料 六三巻三号 一九八〇年五月

## はじめに

一九二四年一月に広東省広州でひらかれた国民党第一回全国代表大会は、ソビエトとの提携、労働者・農民寄りの路線、および共産党員の国民党への個人加入を承認し、その後の中国史に決定的な影響をあたえることになる第一次国共合作（以後、国共合作あるいは単に合作とよぶ）が成立した。合作の目的は大会宣言にあきらかなように、中国に自立と富強をもたらすため「国民革命」を実現することであった。数ヶ月後にはソビエトからの顧問を加えて黄埔軍官学校が開校され、ここで養成された軍事力を中心にわずか二年のうちに広東省は統一される。そして一九二六年七月からは全国統一をめざして北伐が開始された。しかし国民党と共産党のあいだの矛盾は北伐の進展とともに激化し、やがて合作は破綻し両

者は内戦状態におちいつてしまふ。その後ながい戦いの結果（一九三七年に日本の侵略に対抗するため第二次国共合作の成立をみる）が実際には両者の抗争はつづいてきた）、中国大陆には共産党の指導する中華人民共和国が成立し、支配的地位を失なつた国民党は台湾に亡命して現在も対立をつづけている。

以上の事実にあきらかなように国共合作は中国現代史の幕あけであつた。したがつて合作の経過はいうに及ばず、関連する前後の歴史状況をあつかつたかぞおおくの研究が存在している。しかし当事者であつた共産党、国民党およびソビエトの三者が相互に対立しているという現在の政治的状况を反映し、これらの研究のあいだには合作の意義づけや事実関係の記述に相違がみられる。本論にはいるまえにこの点について述べておきたい。

研究のなかでおおきな位置をしめてゐるのはマルクス主義理論にもとづくものであり、国共合作は民族ブルジョア（国民党）とプロレタリア（共産党）による反帝国主義・反封建をめざす統一戦線であつたと定義される。事実、合作の成立は国共両党の自発的なあゆみよりによるものではなく、ソビエトとコミンテルンが親ソビエト勢力をつくりあげるといふ外交目的をおしすすめた結果であり、当初からマルクス主義理論を援用した反帝・反封建統一戦線としての合作の意義づけがおこなわれていた。したがつてこの様な研究がさかんになつたのは当然といえるがその後の中国史の展開によつても助長された。毛沢東は一九四〇年に発表した「新民主主義論」<sup>②</sup>において、マルクス主義理論にもとづいて中国近代史を分析して国民党側の反共理論に反駁を加え、共産党の中国における存在が歴史発展の必然であることを力説した。彼は中国近代史は五四運動をさかんに労働者・農民を中心勢力とするあたらしい民主主義革命の時期（新民主主義革命期）にはいつたと述べたが、国共合作が農民運動の開始や労働運動の拡大を宣言した事実から、合作を中国があたらしい時代にはいつたことを示す政治的転換点であつたと定義した。そして合作を決意した孫文を、従来のブルジョワ民主主義（旧三民主義）者から労働者・農民に依拠しようとするあたらしい型の民主主義（新三民主義）者に変化したと高く評価した。<sup>③</sup> 共産党はこの「新民主主義論」を指導理念として内戦に勝利し、中華人民共和国を樹立した。この結果、「新民主主義論」は

その正確さを歴史的に証明したと考えられた。こうして中華人民共和国はもとより日本などでもおおくの研究者が、「新民主主義論」に示された合作の定義を基礎に据え、マルクス主義理論にもとづく研究を開始した。<sup>④</sup>

同じくマルクス主義理論にもとづくものにはソビエト側からの研究もある。合作の実質的な推進者であっただけに、コミンテルンやソビエト政府の原資料をつかい興味ぶかい事実があきらかにされる。しかしソビエト政府とコミンテルンの指導にあやまりがなかったことを無条件に主張するのと、中ソ対立を反映して中国共産党員のおおくが過少評価されてしまふという偏向がある。このような偏向はともかく、ソビエト側からは合作時期に顧問として中国をおとずれた人々の回顧録が近年かぞおおく出版されており、貴重な資料を提供している。<sup>⑥</sup>

以上の二つのマルクス主義理論にもとづく研究に、なかでも共産党側の研究に鋭く対立するものとして国民党側からの研究がある。<sup>⑦</sup> 国民党側の研究は、国共合作とは孫文が諸階層の連合による国民革命を実現するために共産党員の加入を許した結果（容共）にすぎず、しかるに共産党員たちは階級闘争理論により連合を混乱させ、ついには破壊したという観点に立つ。共産党側が「新民主主義論」にもとづいて孫文を近代史上における国民的統合の象徴として位置づけようとするのに対し、孫文を自分たちの側にとりもどそうとしているのである。このような両者の対立は、「国民革命」を課題としていた中国近代史における正統争いである。国民党側の研究は共産党側にくらべ党務関係の資料がよく保存されており、これらの豊富な資料の活用により当時の複雑な状況がよくわかる。

このほか、事実関係を忠実に追究するアメリカを中心とする研究がある。<sup>⑧</sup> 同様の研究は日本でもみられる。<sup>⑨</sup> これらの研究は政治的立場にとらわれることなく、ソビエト、中国、および国民党側の研究をふくめて、はばひろい資料にもとづいてすすめられており、筆者も本稿を書くにあたり事実関係についてすくなからざる教示をえた。

以上の研究の存在を確認したうえで、筆者は本稿においてつぎのことを意図した。すなわち、共産党の成立前後から国共合作が成立した一九二四年の国民党第一回全国代表大会までの期間に焦点をあて、これまで看すごされるか、指摘され

はしたが深くは論究されなかつた問題をくわしく検討し、中国現代史の幕あけとなつた国共合作の実態をその初発において問うことである。

- ① 鄭魯『中国国民党史稿』（民国十九年）三七七―三八八頁。
- ② 毛沢東選集第二卷四六三―四六五頁。（一九六八年 北京外文出版社）
- ③ 「新民主主義論」第十項『旧三民主義と新三民主義』
- ④ 胡華『中国新民主主義革命史』（一九五〇年）、胡華主編『中国革命史講義』（一九五九年）、胡喬木『中国共産党的三十年』（一九五二年）などが合作時期をふくむ近代史研究の代表的なものと見える。日本側では、岩村三千夫『三民主義と現代中国』（一九四九年）が近代史の新民主主義論的解釈の嚆矢といえよう。
- ⑤ 『コミンテルンと東方』（国際労働運動研究所編 日本国際関係研究所訳 一九七〇年）所収のウェ・イ・グルーニン論文『コミンテルンと中国における共産主義運動の生成（一九二〇―一九二七）』や、ア・イ・カルウトノヴァ論文『コミンテルンと国民党改組問題』など。
- ⑥ 重森宣人「ソ連の現代中国研究」にくわしい。（『アジアクォーターリ』十卷二号、一九七八年四月―六月）
- ⑦ 李雲漢「從容共到清党」（民国五十五年）。郭華倫「中共史論」（民

國五十八年）で合作問題が言及されている。

⑧ Conrad Brandt, *Stalin's Failure in China 1924-27* (Harvard Univ. Press, 1958) や Robert North, *Moscow and China* (Stanford Univ. Press, 1953) など。資料集には Martin Wilber, *Documents on Communism, Nationalism and Soviet Advisers in China 1918-27* (Columbia Univ. Press, 1956) などがある。Harold Isaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution* (1938, London) はムロッキー派の見解だったが、すぐれた労作である。尚、イギリスの E. H. Carr, *The Bolshevik Revolution 1917-1928* (1961, London) が合作時期の中ノ関係を克明に追っており重要である。

⑨ 石川忠雄『中国共産党史研究』（一九五九年）や衛藤審吉『東アジア政治史研究』（一九六八年）などが関連した問題を研究している。国共合作を、直接にとりあげたものには波多野善大『国共合作』（一九七〇年）がある。

## 一 ナショナリストとしての国民党員と共産党員について

1

黄季陸という人物がいる。国父年譜の増訂者として知られるが、国民党第一回全国代表大会（一全大会）にカナダ支部の代表として出席し、共産党員の李大釗や于樹徳らと大会宣言審査委員として宣言の審査にあつた人物である。現在は

国民党側の歴史編纂の責任者として国史館の館長をしている。黄季陸は一大大会での体験を回憶録にまとめている。<sup>①</sup> 一大大会の経過については鄒魯の「中国国民党史稿」により概略はわかる。また、「會議録」<sup>②</sup>も存在しているが省略されている部分も多く、宣言審査委員会での討論など舞台うらでの根まわしまでは到底わからない。黄季陸の回憶はこれらの点を おぎなうものである。もちろんかれが当初から国共合作に反対の立場をとっていたことや現在の政治的立場が反映され、共産党員の言動に対しては批判的描写がおこなわれており、国民党員の発言も「會議録」と照らしあわせると故意に不鮮明にされている部分がある。<sup>③</sup> しかしこれらの点を考慮しても一大大会のようすを知るための不可欠の資料である。黄季陸は、いろいろ興味ぶかい事実をあきらかにしているが、宣言審査委員会での論争を回想して、共産党員たちと国民党員たちとの政治理論における差異は今日から考えるほど大きくはなく、論争のおおくは主観的かつ組織的な排他性がうみだしたものであったと述べている。<sup>④</sup> 合作後、両者のあいだで国民革命のすすめかたをめぐって理論闘争が激化したことをかんがえると、当初、政治思想の面でそれほど差異がなかったというのは奇異な感じがする。しかし、たしかに共産党員たちと国民党員の指導的部分のあいだには、政治思想の面で共通性が存在していた。両者のあいだには人間的な交流関係もあった。合作後、一年半たらずで「孫文主義の哲學的基礎」を発表して反共理論の旗手となる戴季陶はマルクス主義に強い関心をもっており、共産党結成にさいしては孫文にとめられはしたが加入しようとしたという。<sup>⑤</sup> 戴季陶は一大大会では共産党員の国民党加入を擁護する立場にあった。おなじように合作後しばらくすると反共の論客となる葉楚傖も、一大大会席上では共産党員の国民党への加入を擁護している。<sup>⑥</sup> そのほか共産党員の李大釗を孫文に紹介し一大大会にさきだつて国民党に入党させたのは、北京大学での同僚であり後には反共の立場に転じる国民党員の張繼であった。<sup>⑦</sup> 以上の事実の後

に反共に転じた国民党員でさえ当初は共産党員とのつながりが深かったことを代表的にしめたものであるが、両者のつながりをしめす例はすくなくない。<sup>⑧</sup> さらに両者のあいだには当面の政治課題においても共通性が存在していた。かれらとともにめざしていたのは軍閥の混戦に終止符をうち中国に自立と富強をもたらすこと、すなわち「国民革命」であった。

共産党員が最終の目標として共産主義の実現を夢みたとしても、当面する課題は中国の自立と富強であった。このようなことから考えれば両者が合作することは当然のなりゆきであったかのようである。事実、思想および人間関係さらには当面の政治課題の共通性が合作を可能にさせた重要な要素であった。ところが両者は政治路線のうえでは当初からことなつた道をあゆみはじめていた。ではつぎに両者の相違点について考えてみたい。そして共通点と相違点をもつた両者にとつて、合作がどのような意味をもっていたのかをあきらかにしておこう。

## 2

よく知られているように国民党は辛亥革命の成果を北洋軍閥にうばわれて以来、臨時約法の遵守をとまえ、西南の諸軍閥を動員して軍事力による中央政權の奪取（北伐）を画策しつづけていた。かれらの政治理念は共和政体の樹立であり、辛亥革命直後に制定された臨時約法や党の政治綱領であつた三民主義に理論化されている。さらに党内にはマルクス主義に理解をしめすものたちさえ存在していた。しかしそれらの思想性が国民党の政治路線に反映されることはほとんどなかった。国民党は軍事行動による中央政權の奪取と国内統一のためには、政治理念の存在をうたがわせるような軍閥との取りひきさえ辞さなかつた。列強にたいしても原則的に対決する姿勢はなく、妥協や交渉、あるいは援助をひきだす道をつねに模索していたといえる。要するに国民党はきわめて現実的かつ打算的な政治集団であつた。そして党全体としては孫文の強力な指導性のもとに、政略攻争の泥沼におちいつていた。

これにたいし共産党はみずからの政治理念に忠実な集団であつた。いうまでもなく共産党は、あたらしくもたらされたマルクス主義を武器に、軍閥混戦のつづく中国にあらたな道をきりひらこうとして結成されたものである。一九二〇年の夏から冬にかけて各地に共産党小組が成立し、翌二一年七月に上海で第一回全国大会がひらかれる。共産党員たちはマルクス主義理論を忠実に実践しようとしており、ただちに労働者の組織化に着手し、これを中核にして民衆を動員し、帝國

主義と国内の封建勢力に戦いをいどもうとしていた。かれらは列強には議論の余地なく対決する姿勢をとっており、国内においては階級闘争を發動して歴史を前進させようという信念を抱いていた。ロシア革命で有効性が証明されたマルクス主義理論の威力をためしてみようという新生の意気にもえていたといえようか。これには国民党員のなかからも同調者があったことは戴季陶の例でみたとおりである。したがって共産党員たちにとって国民党は、旧態依然たるルーズな党組織と没階級的な三民主義という政策理論をかかげている政略集団にすぎず、否定しのみこえねばならぬ存在であった<sup>⑫</sup>。しかも国民党が軍閥を利用しようとするだけで、自らはんらの勢力基盤をもっていなかったこともあり、すすんで接近するはずはなかった。共産党員たちは自分たちの政治理念を実現させるためには孫文のひきいる国民党ではなく、実力者であった陳炯明や呉佩孚に接近していた。国民党に接近しはじめるのは、両者との関係が破綻してからである<sup>⑬</sup>。

一方、国民党には共産党をこばむ要素は少なかった。党内にはさまざまな思想のもちぬしが存在しており、共産党にみられるような思想的潔癖性はなく、孫文に忠実をちかひさえすれば思想的なことは深く問わない体質であった。孫文は共産党員の個人加入には最初から何の異存もなかった<sup>⑭</sup>。党員のおおくも共産党員の加入を規律に服するという条件さえ認めれば承認する。国民党員たちにすれば、共産党員たちがマルクス主義にもとづく政治変革をめざしていようが、それはこれから試行されるべきあたらしい理論にすぎず、中国の統一という当面の政治課題で共闘することができれば政治理論の差異はさほど問題ではなかったといえる。

とはいうものの国共合作が成立した大きな要因は、たしかに孫文が明確な反帝国主義綱領と労働者・農民寄りの政治路線を採用することを決意し、党内の一部の反対を抑えて、党全体としてもこれを承認したからであった。この結果、共産党員たちも自らの政治的信念にそむくことなく国民党への個人加入が納得できたのである。共産党側はこれを国民党の体質の転換として位置づけようとし、合作後はこの側面を発展させようとした。しかし国民党に加わったあたらしい側面は妥協の産物であった。この点については本論の展開過程であきらかにするが、労働者と農民に依拠して軍閥と帝国主義に

戦いをいどむという共産党の政治路線を国民党が全面的にうけ入れたわけではない。ありていには国民党は党組織のたてなおしや軍事力の強化のためにソビエトからうける援助とひきかえに、共産党の主張をつけたしただけであった。その証拠に合作後も以前とかわることなく軍閥とのとりひきをすすめるし、列強にたいしても柔軟な姿勢をくずしていない<sup>⑥</sup>。そして民衆を無視したような軍事優先の路線を追求する。孫文をふくめて国民党員たちの思想の根底には軍事力こそが力の根源であるという信念があり、民衆のために尽力はするが民衆を動員して政治力にかえていくという考えに乏しく、むしろ民衆のいきすぎをおそれていたといえる。この点が階級闘争理論を信奉し、階級間の矛盾をバネにして民衆を動員しようとする共産党と根本的にちがうところであろう。このような国民党の体質は国共合作後の一九二四年に孫文があらわした上からの改良プランである「建国大綱」<sup>⑦</sup>や、かれが階級闘争理論を否定しつづけた点にあきらかである。したがって国民党にとっての国共合作はまさしく「容共」であり、従来からの政治路線が変質をせまられるときにはいつでも放棄すべき性質のものであった。それゆえに共産党員たちがあたらしくつけた側面を急激に助長しようとする反撥がおきることになり、当初は共産党員を容認していた人びとをも反共の立場においやることになる。

以上が、国共合作を共産党と国民党という二つの政党の関係に限って見たばあいのわたくしの観点である。この観点を中心に据え、合作成立までの経過をあとづけてみよう。

- ① 黄季陸「劃時代的民国十三年」——第一次全国代表大会的回憶(民国六三年再版、民国五八年「毎日快報」原載)。
- ② 「中国国民党全国代表大会會議録」大会秘書処 一九二四年。
- ③ 戴季陶や葉楚傖の共産党員の加入を擁護する発言が「某氏」と記されている内容がほかされたりしている。
- ④ 黄季陸 前掲書八頁。
- ⑤ 張国燾『我的回憶』(一九七一年)第一卷一〇三頁。戴季陶は一九一九年に『建設雜誌』の誌上にカウツキーの「マルクス主義解説」の
- ⑥ 全訳をのせている(『建設雜誌』第一卷五・六号)。
- ⑦ Tang Leang Li, Inner History of Chinese Revolution (1930, London), p. 156.
- ⑧ 共産党員の譚平山は当初は国民党員であった(蔣介石秘録6)一九二五年 サンケイ新聞社、(二二四頁)。逆に共産党員から国民党員に転じた人物に周仏海や陳公博がいる。
- ⑨ 張国燾 前掲書第一卷一二四頁。



⑩ 湖南代表の一人であった何叔衡がマルクス主義の理解不足と工作不足のため出席をゆるされなかったことから、共産党員たちの思想的ストイック性がわかる（張國燾『前掲書第一卷一三八頁』）。

⑪ 一九二一年一月、北京郊外の長辛店での京漢鉄道労働者の夜学校開設をかわきりに、上海、武漢、広州、湖南などで組織化がすすめられた（鄧中夏『中国職工運動簡史』（一九四九年）十四—十八頁』）。

⑫ 陳独秀は『新青年』で、「中国の独立を達成するのは労働者のみである。資本家は皆、外国資本の手先にすぎぬ」とのべており、国民党との連携を理論的に否定していたといえる（『独秀復東孫先生底信』八卷四号一九二〇年十二月）。

⑬ 中国共産党の正史ともいふべき、胡喬木『中国共産党的三十年』もこの事実をみとめている（九頁）。

⑭ 党の要人である呉稚暉や李石曾は無政府主義者として知られていた。

## 二 共産党員と陳炯明および呉佩孚との関係

1

当時の共産党員の活動は二つの範囲にわけられる。ひとつは李大釗の指導下にあった北京を中心とする北方での活動である。もうひとつは上海と広州を中心とする南方での活動であり陳独秀により指導されていた。最初にとりあげる共産党員たちの陳炯明への接近は陳独秀の指導によりおこなわれた。陳炯明は国民党員であった。しかし共産党員たちの陳炯明への接近は国民党そのものへの接近を意味しない。陳炯明は一九一四年の国民党の中華革命党への改組のさい孫文への忠誠宣誓書に署名しなかったことからわかるように、孫文には一定の距離を保って独自の政治見解をもち、支配下に軍事力

⑮ 孫文に合作を打診した最初の人物であるダーリンの回憶（A. Dalin, *Kitaiskoye Memory 1921-27*, (Moscow, 1975) p. 92（一色義和氏の御教示による））。

⑯ 一九二四年九月の広東商團との対決にさいし、孫文はイギリスとの衝突を避けようと腐心し弱腰をつづけ、共産党からの批判のまともになる（蔡和森「北代呢？抵抗英国帝國主義及反革命呢」『嚮導』八三期一九二四年九・十七）。

⑰ 二十五条からなり、軍政・訓政・憲政の三段階をへて共和制にむかうものであるが、第三条「民権」では、政府の訓導により人民に選挙権、官吏罷免権などを実行せしむとあり（鄧魯前掲書六四八頁）、民衆は指導の対象ではない。

⑱ 第五章注⑦参照。

を保有しており孫文たち国民党主流にたいして陰然たる勢力をはぐくんできていた。<sup>②</sup>ところで陳炯明は中国近代史上にはたした役割を否定されている。クーデターにより孫文を広州から追放したからである。孫文が国民的統合の象徴として国民党はもとより共産党からもたかく評価されることになったため、陳炯明は異端者として相方から黙殺されざるをえない。しかし彼は清末から開明的な人物としてきわだった活動をおこなっており、<sup>③</sup>広東省内の共産党員の多くは党の成立する以前から大きな影響をうけていた。<sup>④</sup>共産党員たちが陳炯明に接近したのは当然である。陳炯明は一九二〇年当時、福建省に駐屯していたが、上海にいた戴季陶や陳独秀と社会主義についてさかんに手紙のやりとりをしており、戴季陶などは陳炯明のことを社会主義將軍と賞賛し、その支配地域でなら社会主義教育や新生活運動をこころみることができるとかたっていたという。<sup>⑤</sup>陳炯明は一九二〇年十月に広州を占領すると、陳独秀を広東省の教育委員長にむかえ省内の教育改革をゆだねる。共産党員たちと陳炯明との関係は緊密化する。広州にまねかれた陳独秀はただちに共産党小組と社会主義青年団を組織し、機関誌として『労働声周刊』を発行する。陳炯明もかれらに毎月五百元をわたして『群報』という新聞を発行させ、自らの意見を代弁させた。<sup>⑥</sup>このころ孫文は広州を基地に念願の北伐を計画していたが、陳炯明は広東省内の社会改革を第一にかんがえており、多額の軍事費を必要とし中央の政争にまぎこまれる北伐には反対であった。共産党員たちも労働者を組織し勢力基盤をつくるのが第一の任務であった。したがって北伐には反対であり両者の見解は一致した。かれらは『群報』紙上で北伐反対の論陣をはって陳炯明を支持し、孫文たちを批判したとかんがえられる。<sup>⑦</sup>

共産党員が陳炯明を支持していたため、国共合作推進の立役者となるコミンテルン代表のマーリングも二二年の六月には譚平山をともない二度ばかり陳炯明をたずね、合作の条件を協議したという。<sup>⑧</sup>共産党だけでなくコミンテルンも、当初は孫文よりも陳炯明とむすぼうとしていたかのようである。しかし、マルクス主義理論の実践にひたむきにとりくんでいた共産党とはことなり、コミンテルンの目的は中国国内に大きな政治的影響力を有する親ソビエト勢力をつくることであった。社会主義に理解をしめして一定の軍事力を有していたにしても、広東省内の整備を第一とする陳炯明は地方主義者

であり、中央政界への影響力には限界があった。それゆえコミンテルンは結局は陳炯明とむすぶことにはならなかったとおもわれる。しばらくすると陳炯明はクーデターを敢行して（六月十八日）孫文を広州から追放してしまうので、コミンテルンとの関係は自然消滅する。ところが陳炯明とのあいだに思想的および人間的にふかいきずなをもっていた共産党員たちは苦しい立場にたたされる。

広州をおわれた孫文はただちに永豊艦にのりうつり、四十日にわたり陳炯明軍とのあいだに砲火をまじえることになる<sup>⑨</sup>。一方、陳独秀たちは陳炯明の反乱以前に広州から共産党の本拠地である上海にひきあげてきていた。上海は国民党の根拠地でもあり、国民党員たちは陳独秀をはじめとする共産党員たちに態度の表明をせまったとおもわれる。この結果、共産党は陳炯明との関係をたつことを表明するが、広州在住の共産党員たちはあくまで陳炯明支持を主張し、七月にひらかれた共産党の二全大会で除名や謹慎処分<sup>⑩</sup>にふされた。しかし共産党員と陳炯明の関係がこれで清算されたとは思えない。農民運動の指導者として知られる彭湃は海豊県出身という同郷関係からも陳炯明の大きな影響をうけていたが、陳炯明の反乱後も広東省内にとどまり、その諒解のもとで農民運動をつづけていた<sup>⑪</sup>。彭湃が陳炯明のもとを去るのは一九二四年の三月であり、国共合作を決議した国民党第一回全国代表大会の二ヶ月後である。

陳炯明は、このうち国民党側に軍事的敗北を喫して勢力基盤をうしない、以後はたんなる政論家としての道をあゆむことになる<sup>⑫</sup>。このことから今日ではほとんどかえりみられない人物となっているが、前半生における啓蒙活動と青年にあたえた影響および共産党員たちが注目していた事実を無視してはならない。

2

共産党員たちの呉佩孚への接近は、李大釗の指導により北京を中心とする北方でおこなわれた。呉佩孚は北洋軍閥の中樞に位置する軍閥であり、共産党員がかれに接近したことは反軍閥という政治原則に反するようでもある。しかし呉佩孚

は一九一九年当初からの民族主義的な言動により、民衆のなかに名声をえていた<sup>⑭</sup>。共産党員たちが列強のなかでもっとも敵視したのは日本であり、国内ではその手先きであった段祺瑞および張作霖であるが、吳佩孚はかれらの主張する武力による中国の統一に反対し和平的手段による統一を唱えていた<sup>⑮</sup>。これらの点に共産党員たちが吳佩孚に接近する理由があったが、吳佩孚の幕友として政治処長をつとめていた白堅武は李大釗の友人であり、人間的なつながりも存在していた<sup>⑯</sup>。共産党員たちは吳佩孚を開明的軍閥とよんでいたという<sup>⑰</sup>。しかも吳佩孚は、陳炯明の場合とはことなり中央の政局に決定的な影響力をもっており、有力な親ソビエト勢力をもとめていたコミンテルンやソビエト政府からも注目される。

一九二〇年七月におこった戦争の結果、北方の情勢は変化した。北京政府を支配していた段祺瑞がたおされ、曹錕と吳佩孚のひきいる直隸派と張作霖の奉天派とのあやうい均衡のうえに連合政権が成立した。このうち張作霖は日本をうしろだてにしていたが、吳佩孚は民族主義者としての評判をえており、欧米にも接近していなかった。コミンテルンやソビエトが吳佩孚に注目したのは当然であり、共産党員と吳佩孚の協力関係の成立もコミンテルン代表のマーリングのはたらきかけによる。マーリングは一九二一年の五月ごろに北京で吳佩孚と会見した<sup>⑱</sup>。この結果、吳佩孚を支援する条件で、共産党員たちが京漢鐵道の労働者を自由に組織してもよいという許可をとりつけたものとおもわれる<sup>⑲</sup>。協力関係成立の背景には北京政府内部の対立の激化があった。一九二一年五月、奉天派のあとおしにより親日的な梁士詒内閣が成立したのをきっかけに奉天派と直隸派の対立がふかまり、一年後には武力衝突をひきおこす。吳佩孚には軍事的見地から、駐屯地である鄭州と北京をむすぶ京漢鐵路の確保が必要であった。ところが国内の鐵道はほとんどが梁士詒を頂点とする交通系に支配されていた。共産党員たちは一九二〇年九月から京漢線で労働者の組織化に着手していたが、吳佩孚は交通系の鐵道支配に対抗して京漢線を確保する必要から彼らの自由活動を許可したのである<sup>⑳</sup>。この結果、一九二二年五月の奉天派と直隸派の戦争では京漢線の鐵道労働者たちは吳佩孚を援助し、その勝利に大きく貢献した<sup>㉑</sup>。このあと両者の協力関係はいっそう緊密になる。戦争後も依然として続く交通系による鐵道支配を排除するため、京漢線だけでなく京奉・津浦・隴海の北

方の主要幹線の総稽查に共産党員が任命され鉄道労働者の組織化が推進された。李大釗が友人の白堅武をつうじて呉佩孚に接近し直接に交渉した結果であった。<sup>②</sup> 一九二〇年初頭の北方における労働運動抬頭の背景には、このような事実が存在していた。以上のように共産党員たちは、当初は孫文のひきいていた国民党には注目せず、今日では軍閥として否定的にしか評価されない陳炯明や呉佩孚に接近していた。そしてかれらへの期待はしばらく継続する。このようななかでコミンテルンとソビエト政府により国民党と共産党との合作が画策され、やがては成立するが、複雑な政治状況のなかでかろうじて成立したというべきものであった。

- ① H. L. Boorman, ed., *Biographical Dictionary of Republic China* (Columbia Univ. Press, 1967) vol. 1, p. 173.
- ② 一九一六年に孫文らの画策で広東軍政府内にくっつかの部隊を統率することになるが、これをたちまち私兵化してしまい孫文の意には沿わなかった(Boorman, ed., *Ibid.*, vol. 1, p. 176)。
- ③ 資議局議員として麻薬や賭博の取締りを推進し、一九一九年には『民声報』を発刊して啓蒙活動を行なった。Edward, J. M. Rhoads, *China's Republican Revolution—the case of Kwantung 1895–1913* (Harvard Univ. Press, 1975) 214の活躍がくわく。
- ④ 彭輝たむ青年の海外留学の手配をしたとく(Boorman, ed., *Ibid.*, Vol. 1, p. 176)。
- ⑤ 張国燾 前掲書第一卷九九頁。
- ⑥ 周仏海「我逃出了赤都武漢」(周仏海・陳公博『回憶録合編』、一九六五年、一四五頁)。
- ⑦ 『群報』は未見。共産党員が合作後も一貫して北伐には反対であったことから推測できる。一九二二年六月に広州をおとつれたダーリンも、共産党員が陳炯明を支持し、孫文には冷淡でありほとんど無視してつたといふ(DeLin, *Ibid.*, p. 92)。
- ⑧ 周仏海 前掲書一四五頁。
- ⑨ 『蔣介石秘録』二八頁。
- ⑩ まっさきに陳独秀が張繼らに關係を断つと明言し、あくまで支持を主張した広州支部の譚平山、譚植棠、陳公博は、譚平山と陳公博が嚴重注意、譚植棠は除名された(張国燾 前掲書第一卷三九九頁)。陳公博は陳炯明とのつながりを否定しているが(我与共産党)前出『回憶録合編』四一—四三頁)、国民党の要人となった彼には、反徒とのつながりは都合がわるかったからである。
- ⑪ 彭輝「海豊農民運動報告」(『中国農民』民国十五年)。陳炯明に対する批判的描写にもかかわらず両者の緊密な關係がよみとれる。
- ⑫ 一九二五年十月の敗戦で香港にのがれ二六年には連省自治をかけた中国致公党を率いるが、なすところなく三五年に死去した。
- ⑬ 山東問題で日本と直接交渉することに反対し、国民募金による膠濟鉄道の回収などをなえた(張国燾 前掲書第一卷六八頁)。
- ⑭ 呉佩孚は早くも一九一九年六月十三日に「国民會議」召集の通電を全国に発している(陶菊隱『北洋軍閥統治時期史話』、一九五八年、第五冊一四四頁)。
- ⑮ 鄧中夏『中国職工運動簡史』二七頁。

⑩ 周海 前掲書一四四頁

⑪ 一九二〇年十月には早くも『イズヴェestia』に呉佩孚に期待する記事があらわされていた(Isacos, *ibid.*, p. 64)。

⑫ Tsung Leang Li, *ibid.*, p. 153. 但しここには五月という期日は示されていない。しかしマリーリング自身が二一年の春に中国に到着したとのべていること(Isacos, *ibid.*, p. 64) および張國燾が『回憶録』で、五月中旬に因する記載のなかでマリーリングを、「最近到着したばかり」と形容していることから推定できる(前掲書第一卷二三三頁)。マリーリングは七月に上海でひらかれた共産党第一回全国大会に出席したが、このことも傍証となる。

⑬ マリーリングと呉佩孚の会見には言及していないが「蘇連陰謀文証彙編」(民国十七年)第五冊『中国共産党類』に、「呉佩孚……首先准許京漢鐵路工人組織職業連合会、予以某項協助……」とある。尚、京

### 三 コミンテルンとソビエト政府による国共合作の推進

1

コミンテルンは一九二〇年七月の第二回大会で「民族および植民地問題にかんする決議」<sup>①</sup>を採択し、民族ブルジョアジとプロレタリアの合作により、反帝国主義統一戦線を構築するという理論をうちたてていた。この理論は中国にも適用されることになるが、国民党が民族ブルジョアジの代表とみなされるのは、その政治主張からかんがえて当然であった。したがって国共合作のための理論的根拠はあらかじめ存在していたが、いくつかの問題があった。

第一には国民党の外交姿勢である。マリーリングは北京で呉佩孚と協議したあと、同年の十二月には広東省桂林をおとす孫文と会見する。そしてモスクワへの報告で呉佩孚と孫文のどちらとも関係を持たねばならぬといった<sup>②</sup>というが、一九

漢線での労働者組織化の責任者であった張國燾は呉佩孚との協力関係の成立には触れていない。しかし一九二一年五月に工人俱樂部が成立したとのべており(前掲書第一卷一四四頁)、これは呉佩孚とマリーリングの会見時期に一致する。

⑭ 鄧中夏は、このころ、奉天派が交通系に対抗組合をつくらせ共産党とのあいだで激しい労働者獲得競争がおこったとのべている(前掲書二四四頁)。奉天派にとっても鉄路の確保は重大問題であったにもかかわらず共産党系の組合を武力で弾圧できなかったのは、彼らの背後に呉佩孚が控えていたからであるとしか考えられない。

⑮ 呉佩孚は肖像をきざんだバッヂを労働者におくり功労を記念したという(鄧中夏 前掲書二六頁)。

⑯ 鄧中夏 同右二七頁。

二二年一月の極東民族大会の席上コミンテルン議長のスノヴィエフは、国民党がアメリカに幻想をいだいていることや、モンゴルを中国にかえすようソビエトに要求していることをとりあげて批判をくわえていた<sup>③</sup>。したがって、共産党と国民党の合作はいまだに日程にのぼっていないかったといわねばならない。事実は北京政府の実力者であった呉佩孚に期待をよせていた。ところが呉佩孚はしばらくすると、英・米の影響下にくみこまれはじめ、しだいに親ソビエト勢力としての期待がもてなくなってくる<sup>④</sup>。このころ南の広州では、国民党の評価を一変させるできごとがおこっていた。一九二二年一月からはじまった香港の海員ストライキを国民党は積極的に支援し、ストライキの勝利に貢献した。このできごとにより国民党は、ソビエトの最大の敵であるイギリス帝国主義に打撃をあたえた民族主義団体として評価されることになる。こうして呉佩孚への期待の減少とはうらはらに国民党への接近が開始される。

しかし国共合作を成立させるにはもうひとつ問題があった。「民族および植民地問題にかんする決議」では、共産党員が民族ブルジョアジーと協力するばあい、組織の独立をたもたねばならぬことが確認されていた<sup>⑤</sup>。したがって、合作は相互に独立した政党どうしの同盟、すなわち二党同盟という形態をとるべきものであった。ところが孫文が二党同盟を承知しなかったことから紛糾する。孫文は共産党員が個人の資格で国民党に加入することには何の異存もなかったが、同等の資格での二党同盟は拒否した<sup>⑦</sup>。両党の党勢の差からいっても当然であった。結局、国共合作は孫文の提起した共産党員の国民党への個人加入という形で実現するが、国民党をのりこえたとして相手にしていなかった共産党員たちには容認できないことであった。かれらは「民族および植民地問題にかんする決議」に示めされた統一戦線の理論に忠実な合作、すなわち二党同盟ならばコミンテルン代表の介入をまつまでもなく承認する。しかし個人加入には組織の独立という原則をたてに最後まで抵抗する。それにもかかわらず合作が実現した大きな理由は、コミンテルンとソビエト政府が親ソビエト勢力をつくるという外交政策を優先させ、「民族および植民地問題にかんする決議」での合作の原則をたくみに変形し、原則に固執する共産党員をコミンテルン中央の権威でおさえつけ強引におしすすめた結果であった。

陳炯明の反乱で国民党から態度表明を迫られるという苦境に立たされたこともついで、共産党が国民党との合作を示唆したのは一九二二年六月の「時局についての主張」である。<sup>⑧</sup>反軍閥の統一戦線を構築するため、国民党をふくむ民主党派とのあいだに統一戦線をくむ用意のあることがあきらかにされている。この事實は従来の研究では国共合作成立への積極的要素であったととらえられる。しかし、国民党を民主党派として一定程度は評価しながらも「たえず軍閥にちかづく傾向がある」として批判しており、<sup>⑨</sup>合作を積極的に提起しているとはみなしえない。「主張」のねらいは文面にあきらかなように、折りから吳佩孚が提起した「好人政府」という中国統一プランに反駁をくわえることであった。<sup>⑩</sup>

一九二二年五月の奉天派との戦争に勝利して北京政府の実権をにぎった吳佩孚は、「好人」（清廉な人物）をあつめて政府を組織し、内戦停止、連省自治などの計画を実行して中国を平和裡に統一する計画を全国によびかけた。北方ではおおくの人士が期待をよせたが、吳佩孚と協力関係にあった李大釗ら北京にいた共産党員たちもこの計画に魅力を感じていた。一方、上海にいた共産党員たちは、吳佩孚が開明的ポーズをとろうが所詮は軍閥であり、「好人政府」も状況を一時的に糊塗するにすぎず軍閥の野合におわってしまうという意見であった。張國燾は自分が上海の共産党員たちを代表して「時局についての主張」の草案をもって北京におもむき、李大釗たちに「好人政府」への期待の危険性を説得したとのべている。<sup>⑪</sup>しかし「時局にたいする主張」が出たにもかかわらず共産党と吳佩孚の関係は切れたわけではなく、吳佩孚への期待はこのあととも存続しており、「好人政府」反対が共産党全体の方針としてどこまで徹底したかは疑わしい。したがって「主張」にみられる国民党との連合も、どれほどの現実性をもって提起されたのかは疑問である。

このあと七月に上海で共産党二全大会がひらかれ、「国民党との共同戦線にかんする決議」<sup>⑫</sup>が採択され国共合作が正式に提起された。しかし「時局にたいする主張」と同様に、合作を積極的に提起したとはいいがたい。これは、折りからフ



ランスやロシアから帰国した共産党員たちが統一戦線理論を明快な私たちでもたらした結果であった。したがって「決議」では統一戦線理論の原則に忠実に、国民党を民族ブルジョア政党と規定し、共産党の組織的独立を確認したうえで、軍閥と帝国主義の圧迫を廢除する闘いにさいしてのみ共闘が承認されたのである。とくに共産党組織の独立の必要性は、あたかも合作を拒否するかのように執拗にくりかえされている。<sup>⑭</sup>

以上のように共産党が発したふたつの「文件」は、共産党の国民党への接近の開始を意味するものではなかった。共産党員たちは複雑な政治状況のなかで、自分たちの立場を原則にもとづいてせい、い、っ、ばい、主張していたのである。

ところが大会宣言がでた直後に、マーリングが広州から上海にかえってきた。かれは共産党員には事前の相談なしに孫文とのあいだで合作の条件をとりきめてきていた。そして大会宣言を極左思想であると批判し、孫文は個人加入しか認めないだろうと述べ、この方式による合作を強要した。マーリングを支持したのは秘書役をつとめていた張太雷だけであつたといふ。<sup>⑮</sup> この問題はすぐには解決されず、三週間ほどして西湖で中央執行委員会がひらかれ討議された。マーリングは個人加入に反対する陳独秀たち共産党員に、国民党はたんなるブルジョア政党ではなく国民諸階層を代表している民族政党であり、共産党員が加入しても統一戦線の原則をおかすものではないと主張し、最後にはコミンテルンの決定であると述べ承認させたといふ。<sup>⑯</sup> しかし共産党内には不満がうずまくことになり、共産党員の国民党への加入はのぞむべくもなかった。<sup>⑰</sup> それにもかかわらず合作が進展するのは、ソビエト政府からの国民党へのはたらきかけが開始された結果であつた。すなわちコミンテルンが共産党員たちを理論面で屈服させ国民党側におしやると同時に、ソビエト政府は実利を以って国民党を自分の側にひきつけた。その結果、共産党が国民党に接近せざるをえない状況がつくりだされる。

3

いきづまっていた北京政府との交渉を打開するため、老練な外交官として知られるヨッフエが一九二二年八月にソビエ

ト政府代表として北京に到着した。このころ北京政府は呉佩孚の一元支配のもとにあり、親日派である奉天派との連合政権時代よりも親ソビエト的傾向が回復しているという期待があったとおもわれる。ところが北京政府はヨッフエにたいしモンゴルからの赤軍の撤退を交渉再開の条件として提示し、ほとんど敵対的ともいえる態度をしめした<sup>⑩</sup>。これはうすらいでいた呉佩孚への期待をさらに減少させ、コミンテルンの代表を通じてのみおこなわれていた国民党へのはたらきかけに、ソビエト政府が直接のりだすことになる。しかも当時の状況は、国民党側にはソビエトからののはたらきかけをうけいれさせるのにもっとも適していた。孫文は六月の陳炯明の反乱で北伐計画が頓座したあと、広州の奪回にも失敗し、八月十四日には上海にひきあげてきていた。政治的も、とでをすっかりなくしたのである。ヨッフエは到着早々、孫文のもとに親書をたずさえた使者を派遣し、八月二十五日に上海で、会談がおこなわれた<sup>⑪</sup>。会談では、ソビエトからの軍事援助が話題の中心になったとおもわれる。孫文は五日後の三十日に蔣介石に手紙をだし、ヨッフエに随行してきている軍事要員をよんだので、協議にくわわるため上海にくるよう要請している<sup>⑫</sup>。よくいわれることであるが、孫文は陳炯明の反乱により党に忠実な軍隊をもたねばならぬことを痛感したとおもわれる。ソビエトからの軍事援助を約束する接近にはためらうことなく応じたといえよう。

国民党とソビエトとの接近が実質的なものとなりはじめたことから、コミンテルンがすすめようとしていた共産党員の国民党への個人加入にも糸口がひらかれた。コミンテルンの方針にしたがって、まっさきに国民党に加入したのは李大釗であった。すでにみたように、北京大学の同僚であった張継の紹介による。つづいて個人加入反対の急先鋒であった陳独秀も加入した。個人的意見はともかく、書記長としてコミンテルンの決定を率先して実行したのであるが、国民党が政治的体質をあらためることを承諾したからでもある。ソビエトが国民党を援助するには、国民党が援助されるにふさわしい政治団体としての体裁をもつことが条件であった。そうでなければソビエトやコミンテルン側に援助の名分がたたなかった。こうして九月六日には、陳独秀をくわえた国民党改進黨員会が組織され、党の体質改善のためあたらしい党章や政

綱づくりがはじめられる。②そして九月二〇日になると『嚮導』誌上に陳独秀の「国民党とは何か」という論文があらわれ、国民党はブルジョア政党ではなく諸階層からなる国民政党であるという見解があらがにされた。③陳独秀はマーリングがしめた個人加入のための理論を承認したのである。④

このように理論面と実際面から合作の準備がととのえられた。しかしこのまま順調にすすんだわけではない。共産党員のおおくが個人加入に不同意であり李大釗や陳独秀につづいて国民党に加入しなかったことにもよるが、国民党が政治的とりひきの対象をソビエトだけに限定していなかったことによる。孫文はヨッフエからの使者との会谈と前後して、呉佩孚から派遣された人物とも会見し和平統一についてはなしあつたらしい。その結果、孫呉同盟が世上をにぎわすことになる。⑤孫文は一方では奉天派よりもたらされた呉佩孚に対抗するための同盟申し入れにも応じ、九月二二日には汪精衛を協議のため奉天に派遣した。⑥これら国民党の二つのうごきのうち呉佩孚への接近は、呉佩孚が共産党と協力関係にあったことから共産党はもとよりソビエトやコミンテルンにはかならずしも不都合ではなかった。『嚮導』誌上には、呉佩孚が北京政府から親英米派の人間を排除し、いますこしソビエトにたいする態度をあらためれば連合の基礎ができあがるという意見がみられる。⑦しかし奉天派への接近は論外であった。共産党は国民党のうごきにまっ向から反論している。⑧ソビエトにとつても、国民党の奉天派への接近はのぞましいことではなかった。しかしヨッフエが国民党のうごきを牽制した形跡はない。国民党とソビエトとの接近をつよめるべく努力することがなによりもの良策とかがえていたのである。

以上のように状況は流動的であり、ソビエト政府、共産党、直隸派、奉天派および国民党とのあいだで政治的かけひきが展開されていた。これらのうち呉佩孚と国民党との接近は、国民党がソビエトとの接近をはかっているのがあきらかになると英米から圧力がくわり、呉佩孚が断念したためたぢぎえになる。⑨さらに国民党と奉天派との接近も、国民党が陳炯明の反乱で地盤をうしなっていたため具体的話が進行する状況ではなかった。両者の接近がすすむのは翌年二月に国民党が陳炯明をおいだし広州に復帰してからである。こうして結局は国共合作だけが進行する。

一九二三年になると国共合作は急速に具体化する。まず一月一日に、国民党改進黨員會が「改進黨言」を發表した。党の組織が近代的政党としての体制にととのえられ、政綱には普通選挙の実施や、労働者・農民の保護がうたわれている。<sup>①</sup>しかしこの「宣言」がでたからといって、ただちに国民党の組織が改められたわけではなく、労働者・農民寄りの政策が具体化されたわけでもない。国民党は実際には旧態依然であった。これらの内容をあたらしく規定しなおし、国民党側との苦しい折衝により国共合作を実現させたは、このあとソビエトから国民党顧問として派遣されてくるポロディンである。しかし、ともかく「宣言」がでたことでコミンテルンとソビエトからの国民党への援助には名分が備わりレールがしかれた。一月十二日、コミンテルン中央執行委員會は前年の八月に原則的には決定されていた共産黨員の個人加入に関して具體的な決議<sup>②</sup>を採択し、共産党あてに指令した。ひきつづき一月二六日には、孫文とヨッフエのあいだで、中国の統一と獨立の達成にロシアが援助することを約束した「孫・ヨッフエ共同宣言」<sup>③</sup>がでる。そして二月にはいと、日本におもむいたヨッフエと同行した廖仲愷とのあいだでソビエトからの援助について具體的なとりきめがおこなわれた。

ここで注意しておかねばならないのは、合作後の共産黨員の地位である。コミンテルン中央執行委員會の決議では、「党は厳格な中央集権機構を伴う固有の組織を保持しなければならない」、「独自の旗のもとに、またあらゆる政治グループから獨立して活動しなければならない」とのべられており、個人加入後も組織と運動面での主体性の保持が確認されている。共産黨員の独自性を放棄させる決議を採択することは、プロレタリア革命を最終目標にかかげるコミンテルンには原則として不可能であった。ところが「孫・ヨッフエ共同宣言」では、「共産組織、およびソビエト制度は中国に移入することは不可能である」という共産黨員の活動の可能性を否定したにも等しい確認がおこなわれている。孫文側が要求した結果であろう。ヨッフエは、国民党が改進黨言で体制の一新をあきらかにしたことを評価し、英米に傾斜していく北京政府をみかぎりあらたな親ソビエト勢力をつくる必要から諒承したとおもわれる。もっとも、かれはソビエト政府の代表であり、マルクス主義理論にもとづくコミンテルン外交の原則にしばられる必要はなく、共産黨員の独自性を否定する約

束をしても不自然ではない。共産党員たちも内心はおだやかでなかったろうが、ソビエト政府が暫定的にとりきめた外交文書として無視しようとしたようである。その証拠に『嚮導』には「孫・ヨッフエ共同宣言」を論評した記事はひとつもない。しかしコミンテルンも現実的な問題が生じたとき、どこまで共産党員の独自性を擁護するかは疑問であった。ソビエト共産党員がコミンテルンを指導していたからには当然である。それはつぎに述べる事実からもわかる。

コミンテルンとソビエト政府は、極東地域よりさきに、イギリスの圧迫に対抗するため中東地域に工作を開始していた。この成果はトルコ国民党による国民革命の成功となり、イギリス勢力は排除される。この間、共産党員たちは中国の場合とおなじくトルコ国民党に個人加入していたが、革命が成功すると国民党は共産党員を弾圧しはじめた<sup>④</sup>。この事態にたいし一九二二年十一月のコミンテルン四回大会では、トルコの代議員から大会決議として抗議声明をだすことが提案された。ところがソビエトの代議員たちは、トルコ国民党が共産党員を弾圧しているにもかかわらずイギリス帝国主義と対峙している事実を重視するよう要求し、抗議声明どころかトルコを革命的東洋の前哨とよぶことが決議されたのである<sup>⑤</sup>。大会には中国共産党の代表も参加しているが、どのような気持ちであったであろう。代表のひとりであった劉仁清は国民党への個人加入について報告したさい、いずれは「われわれのまわりに大衆をあつめ、国民党を分裂させることができる」と述べ<sup>⑥</sup>、共産党員の独自性を強調したが、ソビエト代表のラデックに「反帝統一戦線の必要を軽視している」とたしなめられていた。しかし劉仁清の発言は個人加入に反撥する共産党員の気持を代弁していたようにおもわれる<sup>⑦</sup>。

ところが暫くすると、共産党員が国民党への入党を真剣に考えねばならない事態が発生した。一九二三年二月の京漢鉄道ストライキにたいする呉佩孚の大弾圧により呉佩孚と共産党との関係は断絶し、共産党は労働運動の基盤を一举に喪失してしまつた<sup>⑧</sup>。一方、二三年の二月に孫文は客軍の力により陳炯明を広州から追いおとし、三月にはふたたび広州に軍政府を組織した。広州は共産党員たちが以前から労働者の組織化をすすめていたところである。北方での基盤をうしなつたかれらは、労働運動の基盤をつくりなおす必要から国民党に接近しなければならなくなつた。陳独秀はただちに広州をお

とずれ孫文と協議する。このあと共産党は孫文から、自由に活動してもよいという承諾をえる。こうして六月にひらかれた共産党三全大会では国民党への個人加入が決定される。この結果、陳独秀や李大釗ら幹部だけでなく一般の黨員も国民党に加入したとおもわれるが、国民党が改進黨言をだすだけで実行に移そうとしなかったことから活動の余地がなかったとおもわれる。そのうえ共産党内には依然として個人加入に反対するものたちがおり、實質的に合作が進展した様子はない。④⑤。それどころか国民党側の動きにより、合作そのものが頓座しかねない状況が出現する。

孫文は広州に地盤を回復すると自信をとりもしたのであろう、北伐の準備にとりかかる一方では、ソビエトとの提携に熱がさめたらしい。奉天派との接近をつよめるだけでなく秘密裡にアメリカ、イギリス、カナダに使者を派遣し、軍事要員を派遣してくれるよう打診したという。⑥⑦。共産黨員たちは国民党の欧米諸国への接近は知るよしもなかったが、奉天派への接近にたいしてはすくなく批判した。⑧。このころのことであろう、陳独秀によると孫文はマーリングに「共産黨員は国民党に加入したからには規律に服すべきであり、もしソビエトが共産党の立場を擁護するならソビエトにも反対する」と再三にわたり警告し、このためマーリングは悄然としてモスクワにかえらざるをえなかったという。それにもかかわらず合作が成立した理由について陳独秀は、マーリングにかわって赴任してきたボロディンがソビエトからの巨額の援助を約束したからであるとのべている。⑨。たしかに陳独秀のいうように孫文がマーリングに苦言を呈したことは充分にかんがえられる。しかしボロディンからの援助の申し出云々という部分は事実とおもえない。あやうい状況にもかかわらず国共合作が実現するのは国民党のはたらきかけに欧米諸国がとりあわなかったからであろう。欧米諸国にすれば呉佩孚に肩入れし始めた時期であり、奉天派とむすび呉佩孚と対決しようとしている国民党に軍事的援助をあたえるはずがなかった。こうして国民党は、結局は新たな友好勢力をもとめていたソビエトだけにしか援助をもとめることができなかったのである。孫文は廖仲愷とヨッフエのあいだで煮つめられていたソビエトからの援助うけいれを決定し、八月には蔣介石を主席代表とする孫博士代表団をソビエトに派遣する。⑩。おりかえしソビエトからは、海外での活動に豊富な経験をもつボロディンが

国民党の顧問として派遣される。このようにして国民党がソビエトからの援助うけいれを決定したため、とどこおっていた国共合作も進展することになる。しかし予想される国民党内の反撥をおさえこんで組織と政策を一新し、共産党員たちにも納得のいくかたちで合作を成立させるには多くの問題がよこたわっていた。これらの問題をもちまえの政治力できりぬげ、なんとか合作の成立にまでこぎつけたのはボロディンの努力の賜物であった。

- ① Jane Degras, ed., *Communist International Documents*, vol. I, pp. 138-144.
- ② Tang Leang Li, *ibid.*, p. 155.
- ③ Carr, *ibid.*, vol. III, p. 527.
- ④ 一九三二年四月、前年の十一月に締結されていたモンゴル・ソビエト条約が発覚し、北京政府の強硬な抗議により外交交渉にあたっていたソビエト代表のバイケスは掃圜を余儀なくされた。
- ⑤ 国民党の指導下にあった広東総工会が強力に支援した(張國燾 前掲書第一卷二二二頁)。
- ⑥ 「たとえ胎児の状態でもプロレタリア運動の独立を無条件に維持しなければならぬ」とうたわれてこそ(Degras, *ibid.*, vol. I, p. 144)。
- ⑦ テーリング談話 (Isases, *ibid.*, p. 61)。
- ⑧ 『中国共産党史資料集』第一卷二一九—二二九頁(日本国際関係研究所編)。
- ⑨ 「主張」の第四項。
- ⑩ 「主張」の十項目のうち、第五・六・七・八・九項が好人政府批判である。
- ⑪ 陶菊隱 前掲書第六冊二二四頁。
- ⑫ 張國燾 前掲書第一卷二三三—二三五頁。
- ⑬ 『中国共産党史資料集』第一卷二五〇—二六一頁。
- ⑭ 張國燾 前掲書第一卷二三三—二三五頁。
- ⑮ 「自らの階級のため独立して奮闘すべきである」「国民党の従僕になることを意味しない」「自己の組織をわすれてならない」など、枚挙に遑がない。
- ⑯ 張國燾 前掲書第一卷二四〇頁。
- ⑰ 陳独秀「全党同志に告ぐる書」(波多野乾一、『資料集成中国共産党史』第一卷四〇七頁)。前出グルーニン論文は二年八月に個人加入が指令されたとのべている(『コミンテルンと東方』二〇九頁)。
- ⑱ グルーニン論文(同右二二〇頁)。
- ⑲ Carr, *ibid.*, vol. III, p. 539.
- ⑳ 『国父年譜』(羅家倫主編 黃季陸增訂。民国五十八年) 民国十一年八・二五。
- ㉑ 同右 民国十一年八・三〇。
- ㉒ 同右 民国十一年九・六。
- ㉓ 「国民党は何麼」(『總導』第二期)
- ㉔ しかし陳独秀はこの後も合作には消極的であった。陳炯明との関係から国民党員にうとまれていたこともあろう(『国父年譜』の民国十二年十一月二九日に記載されている鄒沢如らの共産党弾劾文に「此回改組・陳独秀因粵人对伊感情大變・乃避去・而以其党徒譚平山出而任事……」とある)、陳独秀は合作後も国民党の中核には加らない。一九二四年のなかごろには国共合作の破棄を求めてコミンテルンを電報せめにしたという(グルーニン論文 前掲書三三五頁)。

②⑤ 蔡和森「統一・借債与国民党」〔嚮導〕第一期一九二二年九月二〇。文中に「自孫中山先生由粵來滬、曹吳代表南下、於是孫吳攜手之聲甚響塵上」とある。

②⑥ 『国父年譜』民國十一年九月一〇。

②⑦ 同右 民國十一年九月二二。

②⑧ 蔡和森「孫吳可在一種什麼基礎上連合呢」〔嚮導〕第四期一九二二年十月四。

②⑨ 蔡和森「批評汪精衛君赴奉返滬後之談話」及び同「国民党人应当做霸師的宣傳員嗎」〔嚮導〕第六期一九二二年十月十八。

③① 陳炯明はクーデター後に孫文のロシアやドイツとの連繫計画を暴露したが〔蔡和森「中德俄三国連盟与國際帝國主義及陳炯明之反動」〕『嚮導』第四期一九二二年十月四、このあと吳佩孚は列強のつきあいを恐れ、連繫計画は他人の捏造であるといったという（前出「孫吳同盟可在一種什麼基礎上連合呢」）。

③② 鄒魯『中国国民党史稿』三四七―八頁。

③③ 「国民党にたいする中国共産党の態度にかんする決議」〔中国共産党史料集〕第一卷二三六―七頁。

③④ 同右 第一卷二〇二頁。

③⑤ Carr, *ibid.*, vol. III, p. 476.

③⑥ Carr, *ibid.*, vol. III, p. 484.

③⑦ 『中国共産党史料集』第一卷一八九頁。

③⑧ Carr, *ibid.*, vol. III, p. 535.

③⑨ 奉直戦後の物価高から鉄道労働者は一九二二年八月にストライキをおこない毎月三元の賃上げを勝ちとった。これは鉄道収入をおおきな財源としていた吳佩孚に損失をもたらした両者の対立がたかまっていた。労働者は二年二月に労働総部を結成しようとしてストライキに訴えたが、弾圧された（鄒中夏前掲書九一頁）。

③⑩ グルーメン論文（前掲書二一五頁）。

③⑪ 胡喬木『中国共産党的三十年』一二頁。

③⑫ 反対派は社会主義青年団を独立させ共産党に対抗させようとしたという（Conrad Brand, *ibid.*, p. 34）この事実は『蘇連陰謀文証彙編』には未収のソビエト大使館からの応取文書にもとづいている。

③⑬ 張作霖に手紙をおくり吳佩孚打倒のため軍費の援助を打診している（『国父年譜』民國十一年五・三〇）。

③⑭ アメリカとカナダには副官（aide-de-camp）の Morris, A. Cohen を、イギリスには陳友仁を派遣した。Georg, E. Sokolsky, The Kuomintang, (China yearbook 1928, pp. 1321-2).

③⑮ 陳独秀「北京政変与国民党」〔嚮導〕第三一・三二期合刊、一九二三年七月・十二）。

③⑯ 陳独秀「全党同志に告ぐる書」〔波多野 前掲書第一卷四〇七頁〕。

③⑰ 『国父年譜』民國十二年八・六。これには共産党員の張太雷も同行した。



#### 四 国共合作の成立

1

ポロディンは一九二三年十月六日に広州に到着した<sup>①</sup>。しかし孫文は陳炯明との戦争の指揮にいそがしく、ようやく十月十四日になって一時的に広州にかえってくる。このときポロディンと会ったとおもわれるが、ポロディンによると、共産党との合作や党組織の改革（以後、改組とよぶ）の話は出ず、呉佩孚を倒すために北伐をやらねばならぬと、ものに憑かれたようにしゃべっただけだったという<sup>②</sup>。ポロディンにとって国共合作を軌道にのせるのがなみたいではないことではなかったのがわかる。広州の共産党代表であった譚平山は到着早々のポロディンに、国民党を改組する見込みはないとたたったという<sup>③</sup>。ともあれ十月二五日には孫文の指示によりポロディンを顧問とする国民党臨時中央執行委員会（以後、臨時中執と略記する）が組織され、国共合作と国民党の改組が討議されることになった<sup>④</sup>。

十月二八日には第一回めの臨時中執がひらかれ、黨員の再登録と、広州市内の各地区ごとに支部をもうけることが決定された<sup>⑤</sup>。旧来のルーズな党組織を、ソビエト共産党に範をとって一新しようとしたのである。張国燾によると決定後ただちに実施され、十一月八日には完成した。十二の支部が設置されて臨時中執の指揮下におかれ、それまで広州で黨員数三万人をとなえてはいたが甚だルーズであった国民党の組織は、三千人の精鋭な組織にうまかわったという<sup>⑥</sup>。

組織の刷新は国民党側に異存のあるはずはなく何の混乱もおこっていない。しかしあたらしい政策の決定は容易ではなかった。

まず、労働者・農民寄りの路線が決定されるまでの経過からみていくことにしよう。このうち労働者寄りの路線の採用には問題はなかった。国民党首自身、一九二二年の香港ストのさいにはストライキ労働者を支持したし、その後も労働運

動彈圧法を廃止するなどの理解ある態度をとっていた。<sup>⑦</sup>これには労働問題がまだ局部的なものであり、中国社会の根本にかかわる重大なものではなかったという理由もかんがえられる。しかし農民問題は農業国中国の根底にかかわる問題であり、その解決方法をめぐっては最後まで紛糾する。

ポロディンは農民問題の解決について急進的なプランをもっていた。国民党員として幹部クラスの地位にあった趙志観という人物によると第二回目の臨時中執の席上ポロディンは、「耕地農有」の宣言をだすよう要求したという。<sup>⑧</sup>これよりさきコミンテルンは一九二三年五月に中共三全大会にあてた指令で「孫逸仙軍が占領した地域では貧民のために土地の没収や、その他の革命政策の全部を実現することが肝要である」と述べ、土地の再分配をも指令していた。<sup>⑨</sup>したがって「耕地農有」とは土地の再分配を意味していたといえる。これは国民党には不可能であった。そんなことをすれば、おおかれすくなかれ土地に投資して地主的性格をもっていた有産階級のすべてを敵にまわすことを意味した。そのなかには海外からの送金を土地に投下していた華僑もふくまれており、かれらは国民党の資金源であった。したがって国民党のめざす諸階層連合の国民革命を破壊するだけでなく、国民党の基盤をほりくずすことでもあった。たしかに孫文は合作後に、「耕者有其田」という自作農創出ともいべき考えをあきらかにする。しかし、将来の展望としてしめされたにすぎず、土地の再分配などという根本的解決にはほどとおいものであった。<sup>⑩</sup>

農民問題の解決方法で、ポロディンと国民党側には根本的なくいちがいがあった。それにもかかわらず国共合作の成立後には農民運動が開始され、地主との衝突必至の減租運動すらおこなわれることになるが、これは国民党側が譲歩した結果であった。ポロディンによると、この間の経過はつぎのようである。<sup>⑪</sup>ポロディンが到着してまもない十一月十二日、陳炯明軍によって前線が突破され、大挙しておしよせてくる陳軍のため広州はきわめて危険な状況におちいった。<sup>⑫</sup>十一月十三日に緊急会議がひらかれたがポロディンは民衆を動員して陳炯明軍をくいとめることを提案し、労働者、農民、小市民を優遇する宣言をだすよう要求した。宣言は、労働者には最低賃金制や八時間労働制を、農民には有償あるいは無償によ

る土地の再分配を約束したものであった。広州付近に一兵の援軍も持たなかった国民党はこれをうけいれ、ただちに宣伝活動が展開された結果、民衆を動員することができ陳炯明軍の攻撃をくいとめた<sup>⑭</sup>。ところが危機がさると国民党は労働者と市民についてはともかく、農民への約束には難色をしめした。ポロディンは孫文と会談し、宣言を反故にするなら国民党は信用を失い自分も国民党をみかぎるかもしれないと述べ、再考をうながした。そして妥協の結果として農民協会の樹立と、実行はされなかったが小作料の二五パーセントの低減について合意をみたという。

ポロディンの証言は大部分が国父年譜の記載と正確に一致するが、陳炯明軍の包囲にたいして民衆が動員され大きな力を發揮したことは、張国燾が『回憶録』の中でふれている<sup>⑮</sup>。かれはこの事実を一九二三年の十二月に国民党の『新民国』雑誌に紹介したが、三千人の国民党員たち(当然、共産党員をふくむ)は活潑な活動をおこない、三万元の軍費を募集して前線におくるだけでなく義勇軍を組織して戦闘に参加したという。ただし急進的な宣言がおこなわれたとはのべていない。すでにポロディンと孫文との妥協が成立しており、ふれるのはまずかつたからであろう。しかし広州での評判がよくなかった国民党<sup>⑯</sup>が一両日で金と人をあつめることができたのは、なんらかの急進的宣伝がなされた結果としかかんがえられない。さらに陳炯明軍の脅威が去ると、国民党が農民にたいする約束に難色をしめたことは、『国父年譜』の簡略な記事とその後状況とを考えあわせることにより推測できる。『国父年譜』によると陳炯明軍の脅威が去った十一月十九日午後七時半から孫文とポロディンの出席のもとに臨時中執がひらかれ、労働者、農民、中産階級の状態を調査することが決定されるとともに、三民主義の解釈は孫文の説にしたがうという一項を党綱に書きくわえることが決定されている<sup>⑰</sup>。国民党が労働者、農民の調査を決定したのはこれがはじめてである。ポロディンが要求した結果であろう。また三民主義解釈は翌年の一大大会でも問題になるが争点は民生主義をどのように理解するかであり、とくに民生主義の農民問題にかんする部分が懸案となる<sup>⑱</sup>。したがってこの日の会議で決定された三民主義解釈の制限も狙いは民生主義解釈の制限であり、直前の状況からかんがえれば農民問題の解決方法にわくをはめようとしたものであったといえる。

最後にポロディンと孫文の妥協の経過については当事者以外に知るすべはなく、他の資料からはうかがい知れない。しかしポロディンはこのあとも農民問題の解決について、急進的プランの実現をあきらめてはいなかった。

以上のエピソードは、国共合作による農民運動の開始がきわどい政治的かけひきの所産であったことを物語っている。このあと国民党は廖仲愷などの例外はあるにしても、共産党員が指導することになる農民運動を、傍観するか、ゆきすぎであると非難することになる。

このように問題をのこしながらも国民党の改組は進行する。十一月二日には共産党員の譚平山をくわえて秘書処が設置され、翌年一月に開催される全国代表大会の事務的手続きが開始された。十一月二九日には孫文の命をうけた廖仲愷が上海に到着し、国民党員たちに改組と全国代表大会の説明をおこなった。ところが孫文は改組の手筈をととのえる一方では、奉天派とのあいだの反直隸派連合の結成にも余念がなかった。十一月二五日には使者を奉天に派遣し、広東省内の平定の見込を報告させ北伐開始の可能性を協議させている。また翌二四年の一月にはアメリカ人の記者にたいし、国内の和平統一を進めるために連席会議をアメリカに主催してほしいなどと述べている。孫文の、軍閥はもとより列強にすら接近しようとしている態度からかんがえると、国民党の改組を目的とする全国代表大会の開催が決定されはしたが、それがどのような成果をおさめるかは予断をゆるさなかった。

## 2

一九二四年一月二十日午前九時、孫文の開会演説をかわきりに、延べ十日間にわたる国民党第一回全国代表大会がはじまった。

第一日めは午前中に議長団と秘書処の人員を選出した。午後は大会宣言審査委員の選出が討議され、孫文の指名に一任することが決定されたあと、ただちに共産党員二名をふくむ九名の宣言審査委員が指名された。このあと「組織国民政府

「案」が提出された。孫文が登壇して趣旨説明をおこなったが、「案」そのものは国民政府の組織が必要であり大衆に宣伝しなければならぬというだけの内容である。前年の十二月に海関接収問題で列強諸国から公式の政府と認められなかった事実に対抗して発せられた単なる外交声明にすぎず、具体的な計画はなにもなかった。毛沢東が発言し、いつ、どのようにして国民政府を樹立するのかを明確にするよう要求したが、議長の胡漢民にうまくかわされ原案どうり通過した。

第二日めは一月二十一日午前十一時開会。党務委員を選出した。午後は二時より開会。大会宣言の審査経過について審査委員の戴季陶と胡漢民から報告がおこなわれたが、「會議録」は報告の内容を伝えていない。しかし民生主義の解釈が統一されず懸案となっていたことが、続いて登壇した孫文の演説によりわかる。その後の状況から考えて共産党員の審査委員たちは、人民生活の幸福をはかろうとする民生主義とは突きつめて考えれば社会の底辺にいる労働者、農民のための思想であると主張し、三民主義全体を階級闘争観で解釈しようとしたものとおもわれる。これに対し孫文は、民生主義は共産主義を包括するとのべ理論的対立を回避しようとしているが結論は出ず、審査委員会での継続討議に付される。

このあと通過した大会宣言の民生主義の項には、労働者には労働法、養老制度、廃者救済制度の制定が約束され、農民にたいしては「土地のない農民には国家から土地を支給する」、「農民銀行を設立して資金を融資する」、などの文字がみられる。そして「率直に言えばこれは農民と労働者のために奮闘することであり、同時にまた農民と労働者が自分自身のために奮闘することである」と述べられており、共産党員の意見がおったようにみうけられる。しかし労働者への約束はともかく、農民にあたえる土地や資金をどのようにしてあつめるのかは具体的に示されていない。要するに目標は高いが具体的実現方法にはとぼしい内容であり、妥協の産物であることをものがたっている。黄季陸は、宣言草案には「土地農有」が明確に規定されていたが、自分が反対してあらためさせたと述べている。ポロディンも、草案にあった「大地主の土地でつくられる土地基金」などの重要項目が右派の反対で削除されてしまったと述べている。

第三日めは一月二十二日開会。午前と午後の議事をへて、「国民党章程」、「紀律問題決議」、「海関問題決議」が通過し

た。これらの議案のうち二つは党组织の刷新をめざしたものであるが、組織の刷新は広州では完了しており何の障害もなく通過した。ただ党章については、ボロディンがつくった草案では国民党総理は選挙でえらぶとなっていたが、大会に提出されたものでは孫文が終身総理に指定され、全国代表大会決定の差しもしどし権や中央執行委員会決定の否決権などの全権を掌握している。<sup>③</sup> 国民党側が要求した結果であろうが修正過程をうかがい知る資料はない。

第四日めは一月二十三日開会。午後の会議で大会宣言が通過する。大会宣言の審査委員会で、民生主義の解釈とともに問題となったのは対外綱領の内容であった。<sup>④</sup> このうち民生主義の解釈については妥協の結果として表現にあいまいさをのこしたが、今日みる大会宣言の対外綱領には海関と租借地の回収、および不平等条約の破棄が明確に規定されている。<sup>⑤</sup> ところがこの日に通過した大会宣言では、これらの点があいまいな表現にされていた。黄季陸は、草案には海関と租借地の回収および不平等条約の破棄が明確に規定されていたが、審査の過程で穩健な内容に改めさせたとのべている。国民党の海外支部が、在留している国の政府から圧迫をうけることになり活動がしにくくなる恐れからである。<sup>⑥</sup> ところがボロディンによると、孫文はこの穩健な内容の対外綱領を採択することさえ、海外から出席している古参黨員たちの反対をおそれ躊躇していた。<sup>⑦</sup> 孫文はこの日の午後、大会宣言が議案として提出される直前にボロディンを秘書処により、大会宣言をとりやめて自分が書いた国民政府のための政府綱領を採択してはどうかともちかけた。これには衣・食・住、および輸送手段についてのユートピア的計画が羅列されているだけであった。<sup>⑧</sup> 国民党が対外綱領で少くとも列強に対立する姿勢を示してこそ、国共合作により反帝統一戦線をつくろうというコミンテルンとソビエト政府の目的が達せられるのである。ボロディンは執拗に孫文を説得した。そして孫文がアメリカ大使シャーマンとの会見内容が歪曲されてつたえられ、愛国者としての自分の名声にきずがついたのを挽回しようとしている好都合な要因もあり、説得に成功する。<sup>⑨</sup>

このあとボロディンと再度協議がおこなわれたのであろう。大会最終日の一月三十日に、孫文の命をうけた廖仲愷が臨時動議をおこない、大会宣言の対外綱領は今日みるような明快なものにあらためられる。<sup>⑩</sup> もっとも孫文が大会の直前まで

欧米諸国に援助をあおごうとしていたことや採択に際して最後まで動揺していたことから、国民党がこの綱領をどこまで実行できるかは疑問であった。<sup>⑦</sup>しかしともかくも列強に対立姿勢をしめす大会宣言が通過したことは、現地の民族主義団体を利用して英、米などの勢力に対抗させようとするコミンテルンとソビエト外交の勝利であった。これにより国民党がソビエトからの軍事援助をうけいられる基盤ができたのであり、国民党改組による国共合作のめどがついたのである。

第五日めは一月二十四日開会。大会宣言の通過を祝い、カラハンからの祝賀電が披露された。一月十五日にカラハンが北京から打電したものである。国父年譜はこの電報を「於一月十五日発、二十三日到達」としている。<sup>⑧</sup>しかしカラハンが一月二十九日に打った電報は即日受信されている。<sup>⑨</sup>十五日発の電報もその日のうちに受信されたとかんがえるのが当然であり、大会宣言が通過するまで伏せてあったとおもわれる。この事実からも大会の成功が楽観されていなかったのがわかる。孫文自身が大会中に動揺しているのである。

第六日めは一月二十五日開会。レーニン死去(一月二十一日)の報に接し、ソビエト政府に弔電を打つこと及び服喪のため三日間休会することを決議。<sup>⑩</sup>

第七日めは一月二十八日開会。国民党員の方瑞麟より、共産党員が党籍をそのままにして国民党に加入すること(二重党籍)への反対動議がおこなわれた。方瑞麟は党章に「本党党員不得加入其他政党」の一条をつつくわえるよう要求した。<sup>⑪</sup>黄季陸によると、この動議は彼と林森、鄧沢如、および謝持らの人々の協議した結果であった。<sup>⑫</sup>しかし共産党員たちが党籍はそのままにすでに国民党内で活動しているという事実があり、大勢を変えようという期待はしていなかったとおもわれる。李大釗はあらかじめ用意していた書面を会場に配布して登壇し、国民革命遂行のため国民党に加入するのであり孫文も承認している公明正大の行為であると訴えた。情理のそなわった演説は反対する人々をも動せしめたという。<sup>⑬</sup>国民党側からも葉楚傖、汪精衛、廖仲愷、胡漢民があいついで発言し、国民革命には勢力の結集が必要であり国民党の規律を守るかぎり問題はないと述べ共産党員の加入を擁護した。<sup>⑭</sup>こうして個人加入はたいした波瀾もなく承認される。

このあと一月二十九日と三十日には残りの議案が討議され、三十日の午前中に大会宣言の対外綱領部分を明確にしたあと中央執行委員および候補委員を選出し、午後の孫文の閉会演説により国民党第一回全国代表大会は終了した。<sup>⑩</sup>

- ① 『国父年譜』 民国十二年十一・六。
- ② Louis Fischer, *Soviet in world Affairs*, p. 636. 尚、本書の序文によるとポロディンはフィッシャーの草稿に目を通してゐる。
- ③ 前出グルーニン論文(前掲書二一七頁)。
- ④ 『国父年譜』 民国十二年十一・二五。
- ⑤ 同右 民国十二年十一・二八。
- ⑥ 張心誠(国憲)「中国国民党全国代表大会与中国革命運動」(『新民国』雜誌第一卷二期民国十二年十二・二〇)。これを張國燾の執筆と判断するのは彼が『回憶錄』で、ポロディンの作成した英文の報告書をもとに国民党全国代表大会直前の広州の状況を国民党の『新民国』雜誌に紹介したとのべており(前掲書第一卷三二三頁)、記事の内容も『回憶錄』につたえる概要と一致しているからである。ただ張國燾は記事の題名を「広州的新氣象」であつたとのべており、この点が一致しないが、記憶ちがいか編集部が勝手に変更したのであろう。
- ⑦ 「暫行新刑律」二二二条以下を廃止してゐた(鈴江言一「中国解放闘争史」二二五頁)。
- ⑧ 李雲漢「從容共到清党」二二二頁。『国父年譜』はこの日の会議の概略を伝えているが、この事実にはふれていない。尚、趙志観は臨時中執のメンバーではないが、オブザーバーとして出席したのであろう。
- ⑨ Degras, *ibid.*, vol. II, pp. 25-6.
- ⑩ 一九二四年八月二三日、農民運動講習所卒業式で「耕者有其田」と題する演説をおこなつた(『国父全集』(民国六二年版)第二冊七一九—七二三頁)。
- ⑪ Fischer, *ibid.*, pp. 636-8.
- ⑫ この事実を文公直『最近三十年中国軍事史』(民国十九年下册一五八頁)や、『国父年譜』により確認できる。
- ⑬ 『国父年譜』には十一月十三日の記事がない。しかし前日の十二日に臨時中執がひらかれ、義勇軍の組織にかんして十三日に会議をひらくことが決定されている。孫文は十二日の午後四時に前線から退却してきており十三日の会議に出席したはずである。
- ⑭ このあと十一月十九日に譚延闓麾下の湘軍が到着し、陳軍は撃退される(文公直 前掲書下册一五八頁)。
- ⑮ 張國燾 前掲書第一卷三二三頁。
- ⑯ 前出 張心誠(国憲)論文。
- ⑰ 一九二四年九月には商人との対立から「商團事件」をひきおこす。
- ⑱ 『国父年譜』 民国十二年十一・九。
- ⑲ 黄季陸 前掲書八頁。
- ⑳ 同右 九頁。
- ㉑ この点については拙稿「第一次国共合作時期の広東省農民運動」(『史林』五八卷六号参照)。
- ㉒ 『国父年譜』 民国十二年十一・二二。
- ㉓ 同右 民国十二年十一・二九。
- ㉔ 同右 民国十二年十一・二五。
- ㉕ 同右 民国十三年一・十一。
- ㉖ 前出『中国国民党全国代表大会會議録』第二号。
- ㉗ 黄季陸 前掲書六頁。
- ㉘ 「中国国民党第一・二次全国代表大会及第二次中央執行委員第四・五次全体會議・宣言及決議案」四四頁。



- ②⑨ 『会議録』第二号。
- ③⑩ 同右 第三号。
- ③⑪ 同右 第四号。
- ③⑫ 黄季陸も民生主義論争の詳細をつたえていない。共産党側からの三民主義批判もしばらくは表面にあらわれない。しかし一九二五年六月にでた戴季陶の反共理論「三民主義の哲学基礎」（波多野 前掲書）や、共産党員である羅綺園の「誰是三民主義的擁護者」（『中国農民』第四期、一九二六年四月）などからこのときの論争の内容が推測できる。
- ③⑬ 『会議録』第四号。
- ③⑭ 鄒魯 前掲書三八四―三五頁。
- ③⑮ 直前で平均地権の解説をしているが、これにもとづいておこなうものべられてはいない。また平均地権そのものが実現性にとぼしかったのはいままでもない。
- ③⑯ 黄季陸 前掲書九頁。
- ③⑰ 前出 重森論文（『アジアクォーターリー』10巻2号）六三頁。重森氏は『チュレバノフ回憶録』所収のポロディンのメモワールを訳出している。
- ③⑱ 「鄧沢如等弾劾共産党文」参照『国父年譜』民国十二年十一月十九。
- ③⑲ 「中国国民党総章」第四章（鄒魯 前掲書三九一頁）。
- ④⑰ 黄季陸 前掲書九頁。
- ④⑱ 鄒魯 前掲書三八六頁。
- ④⑲ 黄季陸 前掲書十頁。
- ④⑳ 前出 重森論文所収「ポロディン・メモワール」。
- ④㉑ これは内容から考えて、孫文が一九二四年八月十七日と二十四日の両日におこなった「民生主義」講演の第三講と第四講に相当するとおもわれる（前出『国父全集』第一冊一九二二―二二二頁参照）。
- ④㉒ シャーマンと孫文の会見は一九二四年一月六日におこなわれた。シャーマンが歪曲して伝えた内容とは、孫文がアメリカに和平会議を主催してほしいとのべたのを少し脚色したらしいが、詳細は不明である。孫文は一月十二日に同様の発言をしており（第四章注②参照）、あながち歪曲ともいえぬのではないか。
- ④⑳ 黄季陸 前掲書二七―三〇頁。ここで大会宣言の起草者について考えてみたい。党綱や党章の草案はポロディンが英文で作成し、廖仲愷が中国語に訳出したことは孫文がみとめている（『国父年譜』民国十二年十一月二十九）。宣言草案も国民党側の反対でつぎつぎに削除された事実から考えて、全文のうち「中国之現状」を解説した部分は別にして「国民党之主義」および「国民党之政綱」という中心部分はポロディンの手になると考えられる（もちろん廖仲愷あたりが翻訳したのであるが）。一大大会『会議録』（第四号）の、審査審査の部分に、審査委員および臨時中執委員と並記して原起草員という記載がみられる。これはポロディンをさすとおもわれる。
- ④㉑ 第一章注⑩参照。この点については稿を改め詳しく論じてみたい。
- ④㉒ 『国父年譜』民国十三年一・二四。
- ④㉓ 同右 民国十三年一・二九。
- ④㉔ 『会議録』第十一号。
- ④㉕ 同右 第十二号。
- ④㉖ 黄季陸 前掲書十四頁。
- ④㉗ 同右 十五頁。
- ④㉘ 『会議録』第十二号。
- ④㉙ 同右 第十六号。執行委員には李大釗ら三名、候補委員には毛沢東、張國燾ら七名の共産党員がふくまれている。
- ④㉚ 同右 第十七号。

## 五 合作後の経過について

問題をのこしながらも国共合作はスタートした。しかし、たちまち対立が生じる。共産党員たちが組織の独立をたもとうとして分派活動をおこなったからである。このうごきは労農運動の進展のなかでつよまる。<sup>①</sup> その結果、共産党員の個人加入を容認した国民党員たちもしいに反共の立場に転じることになる。六月には監察委員会から共産党員の分派活動に対し弾劾がおこなわれた。<sup>②</sup> しかし孫文をはじめ廖仲愷、胡漢民、汪精衛などの中心人物はさほど懸念した様子はない。国民党規約では孫文の権力は絶大であり、最終的には共産党員を抑えることができたのである。したがってロシアからの援助をひきだすためにも少々のことには目をつぶっていたとおもわれる。共産党員の勢力伸長が大きな問題となるのは、孫文の死後、委員制にもとづく国民党が組織され国民党内の権力が分散してからである。国民党主脳の関心事は陳炯明に勝利して広東省内での勢力を回復し、北伐を遂行することであった。孫文は全国代表大会が終了して一ヶ月もたたぬ二月二十日、はやくも北伐にむけての体勢たてなおしを指示しており、四月十二日には「建国大綱」をあらわし北伐完成後の計画をあきらかにする。「建国大綱」が、民衆寄りの色彩をつよくうちだしていた代表大会宣言と著しく趣きを異にしていたのはいうまでもない。<sup>③</sup> コミンテルン中華代表であったヴォイチンスキーは六月のモスクワへの報告で「国民党の指導の中核には運動の基盤を勤労者住民層のうえにおこうというつよい願望もなければ経験もない。……その結果、勤労大衆は政府への不満と個々の政府要人への不信をますます表明しはじめている」とのべている。<sup>④</sup>

八月になると孫文は三民主義の連続講演をおこない、「民生主義」の講演では一月の全国代表大会での理論的対立を回避しようとした姿勢を一変させてマルクス主義を批判し、大会宣言にみられる階級的観点をうち消そうとする。<sup>⑤</sup> そして九月には江浙戦争<sup>⑥</sup>の勃発をきっかけに、奉天派との反直隸派連合にもとづいて打倒吳佩孚を唱えて北伐に出発する。共産党員たちは国民党の行動を一大大会で決定された路線に違反するとはげしく批判するが、国民党側は批判を黙殺したま

ま軍事優先の路線をあゆんでいく。

このあと二五年三月の孫文の死をきっかけに、彼の家長的人格と絶大な権限によりおさえこまれていた国共合作の矛盾が露呈しはじめる。孫文の死の三ヶ月後には国民党内の反共のたかまりを背景に戴季陶が「孫文主義の哲学基礎」をあらわし、三民主義は階級闘争理論とあいられないと述べ共産党員に対し国民党からの退出を要求する<sup>⑩</sup>。そして労農運動の急激な発展による共産党の勢力伸長とあいまって、国民党内には「容共」の存続をみとめる「左派」と共産党員の「排除」を主張する「右派」の対立が発生し<sup>⑪</sup>、あいつぐ軍事的成功による勢力の拡大にともない、国共合作をめぐる政治状況は急テンポで展開することになる。

① 組織部長に就任した譚平山は共産党のシンパばかりを入党させようとしたという。このほか工入部秘書の馮菊坡は共産党系の労働組合にばかり肩入れしたという（鄒魯前掲書四〇五―六頁）。尚、共産党側の文書である「広東農民運動報告」（一九二六年）には、農民運動における共産党員たちの分派活動があざからかである（前出拙稿『史林』五八巻六号参照）。

② 『国父年譜』民国十三年六・十八。

③ 孫文は一九二五年三月十二日に北京で客死するが、汪精衛、廖仲愷、胡漢民らは一九二五年六月二四日に委員制にもとづく政府組織法を発布し汪精衛が委員長となった（波多野乾一『資料集成中国共産党史』一〇二頁）。

④ 『国父年譜』民国十三年二・二〇。

⑤ 第一章注⑥参照。

⑥ 前出 グルーニン論文（前掲書二六頁）。

⑦ 「……マルクスは階級闘争こそが社会進化の原理と考えたがこれは原因と結果をさかさにしてしている。……したがってかれの学説は……各国の社会に発生した事実と符合しなくなっている。」とのべている（民生主義第一講・民国十三年八月三日、『国父全集』第一册一七一頁）。

⑧ 直隸派の江蘇總督齊燮元と奉天派と協力関係にあった皖系軍閥盧永祥のあらそい。

⑨ 彭述之「江浙戦争与国民党」（『嚮導』第八四期一九二四年九・二四）。

⑩ 波多野 前出『中国共産党史』第一卷一〇二―三頁。

⑪ 孫文死去の直前の一九二五年三月八日に、はやくも右派は北京に「国民党同志俱樂部」を結成しており、間もなく成立した広州の国民政府と対立することになる。同年十月には新「右派」として西山會議派が出現する（波多野乾一『中国国民党遺史』三一〇―一二頁）。

## おわりに

本稿では国共合作がもっていた矛盾に焦点を当て詳しく考察したわけであるが、矛盾の存在にもかかわらず国共合作が中国史にあたえた影響は、はじめにのべたようにきわめて大きい。それは両党の党員が互いに牽制しあいながらも「国民革命」の実現という共通の目標に邁進したからである。したがって孫文の歴史的評価もつぎのように位置づけられる。すなわち個人的思惑がなくなるものであったかにはかかわらず、孫文は国共合作という中国現代史の幕あけとなったできごとの決断者であり、まもなく死ぬ。おそらく孫文にはその後の激烈な状況の変化は予想できなかったのではないか。かれは現代史の発端に口火をつけて死ぬ。この口火をつけたことで、かれの役割はおわったというべきであろう。

〔付記 本稿は一九七八年三月に「ふびと」三十五号（三重大学歴史研究室）に発表した研究ノート「第一次国共合作について」を発展させたものである〕

（三重大学講師

# Martin Bucer und die Abschaffung der Messe in Strassburg

von

Hiroyuki Nakatani

In den zwanziger und dreiziger Jahren des 16. Jahrhunderts wurden zwei reformatorische Gruppen in Deutschland gestaltet: über Norddeutschland breitete sich die Lehre des Luthers aus und über Oberdeutschland die des Zwingli und Bucers.

Bernd Moeller hat den Unterschied zwischen den beiden betont und die reformatorischen Bewegungen in Oberdeutschland für den Vorboten des Calvinismus gehalten. Dagegen hat Steven E. Ozment die Homogenität zwischen den beiden akzentuiert. In diesem Aufsatz untersuchen wir die Gültigkeit der These Ozments in Strassburg, das eine der wichtigsten Reichsstädte in Oberdeutschland war. Wir bemerken die Abschaffung der Messe in Strassburg, die ein charakteristisches Ereignis für Oberdeutschland war. Insbesondere werden die folgenden Punkte geprüft: wie die Messe abgeschafft wurde, in welchen Punkten sich die Lehre Bucers von der Luthers unterschied, und was für Einflüsse sie auf die Abschaffung der Messe ausübte.

# On the Formation of the First Nationalist-Communist Cooperation

by

Minoru Kitamura

The First Nationalist-Communist Cooperation was established with difficulty under complicated political situations. The aim of the Cooperation was to carry out the "National Revolution". Among the members of both the Nationalist and Communist parties, existed not only personal relations but also some similarities in political thought. Both sides,

however, were to employ different means to accomplish the Revolution. The Communists did not regard Nationalists (Kuomintang) as partners in performing the Revolution. They had close relations with Ch'en Chiung-ming 陳炯明 and with Wu Pei-fu 吳佩孚, both of whom are regarded as nothing but warlords today. On the other hand, the Nationalists didn't regard the Communists as equal partners with enough political influence either. Under these circumstances, the Communist International and Soviet government tried to make Communists and Nationalists cooperate to establish a pro-Soviet power in China. However, because of the Kuomintang's leaning towards Western powers and because of strong opposition from the Communists, it was difficult to make both sides enter the Cooperation. Finally, Communist relations with Ch'en Chiung-ming and Wu Pei-fu were ruined and Kuomintang was not accepted by Western powers, it, therefore, became necessary for both sides to approach each other in order to form the Cooperation. However, the contradictions between the two parties became more and more serious despite their official Cooperation.